

證空における積尊觀

大塚靈雲

法然門弟のひとりとしてその思想を継承した證空（一一七七〜一二四七）の、初期教学の代表的な著述である『自筆鈔』を通して、證空初期の教学に「仏陀積尊」がどのように位置づけられているかを考察する。證空における積尊は、衆生化儀の存在として特色があり、重要な意義をもつからである。

一、仏身仏土觀

まず證空は、仏陀積尊をどのような仏身ととらえ、その淨土をどのようにとらえているであろうか。

釈迦如来ひとり、大悲余に超えて五百の大願を發し、誓願世に超えて人壽百歳の時に出で給ふ。（中略）其の因位の誓願既に成じて、正覺成り給へる体なれば、果の上に大悲抜苦の名殊に顯れ給ふ。

（中略）「隱於西化」といは、『涅槃經』に説く所の無勝の淨土を指して、西化と云ふ。彼の淨土は是より西方四十二恒河沙の世界を過ぎて是あり。釈迦の報土なり。かしこの化導を此の世界の八相成道の機に隱して、直ちに凡地より修行して成仏すと示し給ふ故なり。『法事讚』には「捨彼莊嚴無勝土、八相示現出閻浮」と云ふ。

善導『法事讚』と『涅槃經』を典拠にして、ここより西方四十二恒河沙の仏土を過ぎて、積尊の淨土たる無勝淨土の化主がその化導を隱して、この娑婆人壽百歳に出て八相成道の機となり成仏を果たしたものと位置づけている。したがつてその淨土は五百大願成就の別願酬因の報土であつて、大悲抜苦のために凡地に出現した仏身なのである。ではその仏身の性格はどういうものであろうか。

「驚入火宅之門」といは、無勝淨土に報身自覺窮滿の智、常に住し給へりと雖も、覺他窮滿の大悲に催されて、我等が五濁亂漫の苦に逢へる事をみそなはずに、大智の心靜ならず。速やかに此の三界に出でて八相を唱へ給ふ。

因位の五百大願を成就した自覺覺他覺行窮滿の報身仏が、いま大悲に催されて三界に応を垂れたのであつて、その本仏としての仏格は報身と位置づけている。しかしこの報身仏觀は阿弥陀仏と不離一体の關係において位置づけられる。

「覺行窮滿」を「為仏」と云へば、是則ち化身の相にあらず。実修

実證の法身の相なり。化身は此の報身の功德を衆生に説き聞かせん為の身なれば、仏の義を積する時は、眞実の本意を存して、報身の仏の相を積するなり。（中略）³ 釈迦・彌陀一仏と積する心なり。

として、能所不離の「釈迦・彌陀一仏觀」とする。しかし基本的には、眞如法性としての法身の体をもつことは明らかである。「一切衆生眞如の理を備へて、法性の体等し。」⁴ したがって證空における積尊觀は、基本的な法報応の三身思想を導入しつつ、積尊を単に応化身と見るのではなく、積尊実修実證の報身報土より「報身の功德を衆生に説き聞かせん為の身」としていることが特色である。その所説も「報仏迹を垂れて、八相成道して觀門を開き給ふは、是を説かん為なれば、釈迦の説は彌陀の説に帰す」⁵ ることになる。

これらの理解はもちろん、善導の仏身觀に立脚していることは言うまでもないが、證空の中期の著作『他筆鈔』⁶ に至っても同様の仏身觀が継承されていることが確認される。

二、積尊の性格

仏の字より能化の説の心を顯す。是則ち行門なる故に。彌陀は境の仏なり。能化の義疎し。行者の修習力より顯るべしと分別する故なり。釈迦を以て能化とはするなり。⁷

彌陀を所觀の境とするのに対して、積尊を能化とする。その能化は一応行門の説をもつて衆生を濟度するのである。

大悲は釈迦如来の徳、諸仏に異に濁世の機を度し給ふ故に、一実の法雨、積尊調機の大悲より一切衆生に注ぐと云う心なり。⁸ 世尊といは、今の觀門の教主、恩徳広大の釈迦如来なり。⁹ 『觀經』の觀門の道理を得つれば、佛出世の本意、彌陀の別願を説かんが為なり。此の別願の詮を尋ねれば、未來惡世の凡夫を度すにあり。¹⁰

しかし報身仏より応化した積尊は、恩徳広大大悲の徳をもつて未來濁世の機を調機し、出世の本意である『大經』所説の別願称名念佛をもつて濟度せんために、『觀經』十六觀門の經説を説くのである。このことから證空における積尊は能化ではあるけれども、「觀門の教主」に他ならない。

三、積尊の教説觀

ではその積尊出世本懐の教説とは、どのような性格を有するものなのであろうか。

釈迦は能く淨土の法を説きて凡夫を度し給ふ。觀門是なり。彌陀は能く説かれて來迎し給ふ。弘願是なり。此の法説かるれば凡夫必ず撰せらる。『觀經』の觀門の道理を得つれば、仏の出世の本意、彌陀の別願を説かんが為なり。¹¹

積尊は衆生濟度のために出世の本意である淨土の法（『觀經』所説の觀門）を説き、それによって來迎仏（具体的には第七觀の住立仏）である彌陀弘願が顯れるとする。すなわち積尊を能説・觀門、彌陀を所説・弘願の關係に位置づける。ではそ

の『観経』の所説の「観門」と何か。

能詮の定散は要門なり。所詮は能詮に依りて顕る。此の故に要門を一經の本意とす。其の要門は定散二門なれば、即ち十六の観門なり。¹³⁾

釈尊の出世本懷は、『大經』所説の本願を説かんがためである。しかしその本願は『観経』所説の定散二善十六觀の要門を通して初めて弘願として開顯する。釈尊は「能詮」「観経」所説の要門をもって弥陀の功德を顯わし、『大經』に説かれる弥陀の本願（弘願の体）を所詮とする。従つて『観経』・『大經』・要門（観門）・弘願、釈尊・弥陀をそれぞれ能所の關係に置きつつ、しかしながらその關係は「所詮は能詮に依りて顯る。能詮必ず所詮ある故に、要門開くれば、弘願顯る」の¹⁴⁾であり、そこにこそ釈尊出世本懷としての『観経』一經の本意がある。¹⁵⁾

釋名の心、無量寿の名字より、依正二報、通別真仮等の相を開きて、是を釈す。是則ち弥陀弘願の名字より、釈迦觀門欣慕の法を説き給へば、此の觀門還りて弘願に帰すべし。觀門に留まるべからず。¹⁶⁾

しかしともとその根本を尋ねるならば、依正二報・通別真仮の諸相といえども、すべて弥陀弘願の名字より開かれた釈尊所説の觀門・欣慕の法であつたのである。したがつてその觀門の法は弘願に帰することによつて始めて完結する。（今の

證空における釈尊觀（大塚）

『観経』は、弘願より開けて歸りて弘願を顯し、弘願を成じて又弘願に帰す。一切の凡夫の出離是による。¹⁷⁾。觀門はあくまでも「欣慕の法」であつて、説の如く行すべき行門の法ではないのである。釈尊によつて説かれた觀門は、未來世一切の凡夫が弘願を欣慕し通入すべき法門であつた。

- 1 『西山叢書』一・三〇頁
- 2 一・三十下
- 3 一・三九下
- 4 一・三三上
- 5 一・四八下
- 6 五・五三下、五七下
- 7 一・四〇上
- 8 一・三三下
- 9 一・一四上
- 10 一・三五上
- 11 一・四〇下
- 12 一・三五上
- 13 一・一上
- 14 一・四九上
- 15 一・三下
- 16 一・四三下、四上
- 17 一・四六下

（キーワード） 證空、釈尊、仏身仏土、觀門

（西山短期大学専任講師）